

2009年度 東京女子大学 自己点検・評価

東京女子大学

自己点検・評価委員会

委員長(学長) 眞田 雅子

現代教養学部の理念

本学が90年間堅持してきたリベラル・アーツ女子教育は、社会、国家、世界という公共世界のなかで自己確立して生きる女性を育てる教育であり、揺るぎない世界観、歴史観、死生観をもって自己の存在を位置づけ、生きる力を創造する教育である。

本学部においては、この本学の基本的な教育理念の上に立って、国際化、高度情報化、少子高齢化が進み、共生社会の推進が求められる時代的要請に応えて、「内外の様々な分野で、活躍できる専門性、国際性、豊かな教養を備えた女性、専門性をもつ教養人の育成を目指した、女性の自己確立とキャリア探求をサポートするリベラル・アーツ教育」を推進する。換言すれば、「広い識見と創造性を有し、専門性をもつ教養人として、現代社会の多様な課題を主体的に解決しうる人物の育成」である。

2009年度自己点検・評価のテーマ

『現代教養学部の理念と現状について』 - 新学部が抱える問題点の把握と将来の発展に向けての検討 -

評価のポイント

- (1) 学部改組により、2学部体制の問題点は解消されたか。
- (2) カリキュラム、教員配置等は、新学部の理念に適合しているか。
- (3) 新学部(本学)が進むべき方向性は明確か。本学の将来に向けての展望は何か。

1. 点検・評価の経緯

本学では、毎年テーマを設定し、自己点検・評価を実施することを2007年7月20日(2007年度第2回)の自己点検・評価委員会で決定した。

2009年4月、本学は、「現代が求めるリベラル・アーツ教育・教養教育の充実・実践と、それを可能にする合理的な教員組織の構築」を目指し、「学科別の研究領域に重点を置いてきた文理学部と、現代性・国際性・学際性を中核とする現代文化学部」を統合し、この2学部の長所を併せ持つ「現代教養学部」を立ち上げた。リベラル・アーツ教育のさらなる深化と推進をめざして、本学がこれまで行ってきた人文学・社会科学・人間科学・数理学の各分野にわたる教育研究活動に加えて、複合的な視点からの探究を可能とする学際教育の充実をはかった。

受験生の動向からすると、この現代教養学部設置の趣旨に対して一定の社会的評価を獲得したといえる。学生定員に対する志願者倍率は、2009年度の13.4倍に続いて、2010年度も11.2倍と堅調な数字を示している。

このような現状に満足することなく、新学部がもたらした成果とそれが内包する問題を可視化し、成果をさらに充実させ、問題の解決に注力しながら、新学部が発展的に機能するための方途を明確にするために、標記のテーマで自己点検・評価を行った。以下報告する。

2. 現状における問題点と今後の検討課題

上記評価のポイントをもとに点検した。

(1) 学部改組により、2学部体制の問題点は解消されたか。

新学部の理念として掲げられた各学問分野の融合と統合はなされたか、教学運営の効率が高められたかという点については、1学部4学科12専攻の新体制をとることによって、2学部10学科の旧体制に比べると、一層わかりやすい構成となった。1学部4学科12専攻に再編したことで、ディシプリンの独立性を保持しながら学際化を推進することが全学的に可能となった。一方、既存の学科の枠組みは解体しないという前提で学科を専攻に移行する形で改組を進めたという経緯があるため、改組後も学科間、専攻間で学問領域の重複が随所に見られる。それらが学科・専攻の特色を見えにくくしていることは否めない。このことは、学科間での共有授業が複数存在していることにも表れている。この面における改革を進めなければならない所以である。

教学組織の効率面では、教授会の統合等により、意思決定の迅速化が図られるという成果がもたらされた。組織運営の効率化は従来からの懸案であったが、社会や学生のニーズにも迅速な対応が可能となった。

(2) カリキュラム、教員配置等は、新学部の理念に適合しているか。

「専門性を持つ教養人」の育成のために、「全学共通カリキュラム」と「学科科目」から成る教育課程は専門性と学際性を併せ持つ学習が可能になるように構成されている。「学科科目」のカリキュラムは、それぞれの専門分野を深く学ぶとともに、学科内他専攻の専門分野についても履修することができるような柔軟な編成としている。「全学共通カリキュラム」は、本学のリベラル・アーツ教育の中心として、学科・専攻での専門科目とは異なる視角や広い視野、そして深い識見を習得させるという目標を掲げている。その制度的な基盤として2009年度に設置された全学共通教育センターの活動が軌道に乗り、「全学共通カリキュラム」が円滑に運営されはじめている。

2009年度は、教育課程に設置している必修科目、選択科目がともに、設置計画通りに開講された。カリキュラムに対する学生の総合的な評価は、2009年度の1年次生に対するアンケート結果によると、「学業」、「教養を養う」のいずれに対しても、肯定的評価（「充実している」「やや充実している」）が、77.9%、64.6%と、過半数に達しており、設置目標を十分に達成できたといえることができる。

「学科科目」については、1年次必修の講義科目（専任教員によるチェーンレクチャ

一方式)が、学科内における専門分野の融合的な学習への導入として設置されている。それぞれの学科の多様な学問領域をカバーすることに成功したと評価できる。担当教員へのヒアリングでは、隣接他分野の知識の習得によって学生の視野を広げる効果をもたらし、学際的な学習の面白さを学生が経験できた点が高く評価された。受講した学生からも、自分の専攻以外の講義を聴くことができたことに積極的な評価が寄せられた。「全学共通カリキュラム」についても、大学での学習に必要な基礎的学力の育成と多角的な視点の獲得という教育目標を十分に達成できたと評価できる。さらに、他学科他専攻の学生とともに学ぶことで、多様な視点や考え方が存在することを認識し合う副次的な効果も生まれている。

上述したように、多様な成果がすでに獲得されているものの、一方でカリキュラムや教員配置においては、いくつかの固有の問題が残っており、改善・改革が必要である。以下、各学科の点検・評価の結果を述べる。

人文学科

哲学・史学・文学を統合した学科である。各分野における中心的領域を深く学ばせるような順次的、体系的な教育課程を編成している。既存の人文学系の学科を1学科に統合したことにより、専門の枠内に閉じこもることなく、各自の専門分野との関連を意識しながら他専攻の科目も学習することを可能とした。しかし、人文系の志願者は減りつつあり、長い歴史が培ってきた知識を学ばせつつ、現在の学生の知的好奇心をかきたてるような設置科目や教育内容の一層の工夫と充実が求められる。

また、この学科は、他学科との間に多くの重複する領域を抱えている。たとえば、日本文学専攻は、国際社会学科(国際関係専攻)と日本文学、日本語学で重なり、人間科学科(言語科学専攻)と日本語学において重なっている。英語文学文化専攻は人間科学科(言語科学専攻)と英語学・文学(翻訳)、また史学専攻は、国際社会学科(国際関係専攻)との間で歴史学の重複がある。重複領域の整理と統合が必要である。

国際社会学科

近年の女子学生の社会科学分野への関心の高まりに応えるため、社会科学分野を特化させた学科である。当該学科の設置により、社会科学の方法論を国際関係、社会学、経済学の観点から複合的に探求することが可能となった。多面的な諸問題を社会科学の互いに近接する分野を学びながら知識を深めることを目指したため、多様な分野の科目を設置している。それが逆に、社会科学系の充実を謳った学科としての特色を希薄化したとも言える。設置科目の整理と科目間の関係性を明らかにしたカリキュラム編成が課題である。教員配置についての検討も必要である。国際関係専攻については、国際社会を複数の視座で捉えられるよう、教育課程の中に日本文学、日本語学、歴史学、文化人類学、国際関係論、国際法から政治学まで多様な科目を設置している。そのことが返って専攻のアイデンティティーを見えにくくしている。

ここでも他の学科との間に重複する領域がある。国際関係専攻は、人文学科(日本文学専攻、史学専攻)と日本文学、日本語学、歴史学の重複があり、人間科学科(言

語科学専攻)と日本語学の重複が見られる。人文学科と同様に、重複を整理する方向での改革が必要である。

人間科学科

人間の認知的活動を明確に把握し、周囲の人間との関係性や環境との相互作用などを通して形成される行動や態度、人間関係や世論を総合的に探求することを目指して設置した学科である。心理とコミュニケーションの2専攻においては、実験・実習科目を段階的に履修させ、科学的方法論や探究心を身につけさせるため、1年次よりそのことを意識した実験や演習を設けている。言語科学専攻は、英語と日本語を軸にした「ことば」の研究を掲げているが、受験生にわかりにくい面もありカリキュラム上の工夫が求められる。

言語科学専攻は、人文学科(日本文学専攻、英語文学文化専攻)との間で日本語学・英語学・文学(翻訳)、国際社会学科(国際関係専攻)との間で日本語学などの重複があり、コミュニケーション専攻は、数理科学科(情報理学専攻)との間で情報学の重複が見られる。特に情報学は理系の情報学との違いを受験生にもわかりやすく明示していくことが求められる。また、コミュニケーション専攻と心理学専攻との間で学問領域が重複している。

数理科学科

歴史ある数理学科の伝統を維持しながら、現代の情報通信技術社会でも活躍できる女性の育成を目指し、数学専攻と情報理学専攻の2専攻を設置している。数学を基礎に置き、数学、情報学、自然科学の3つの分野を横断的に学べるカリキュラムを設置している。3分野を連携させた教育を行うことで、高度な科学技術と急速な情報化社会に対応する数理科学的知識の習得を図っている。今後は、コストパフォーマンスを高めるとともに、学科の方向性をより明確にし、自然科学系の学問分野を今後どのように発展させていくのかが課題である。

また、1学部の中に位置する学科として、文科系、社会科学系とどう連携させていくかが検討課題である。

情報理学専攻は、人間科学科(コミュニケーション専攻)との間で情報学の重複が見られる。ここではどのような情報学を志向しているか明示することが求められる。

(3) 新学部(本学)が進むべき方向性は明確か。本学の将来に向けての展望は何か。

自己点検・評価を通じて以下に述べる3項目が喫緊の課題であることが明らかになった。

カリキュラム、教員配置等、新学部設置後に顕在化してきた問題点を解消する、21世紀にふさわしい、より魅力ある学科づくりを目指す、学部、学科、専攻の特色をわかりやすく、はっきりと見えるようにする、以上の目的を達成するために第二段階の改革が必要である。

なお、今回は学科のカリキュラムと教員配置を中心に自己点検・評価を行ったが、共通教育所属の教員配置、全学共通カリキュラムについても自己点検・評価が必要である。